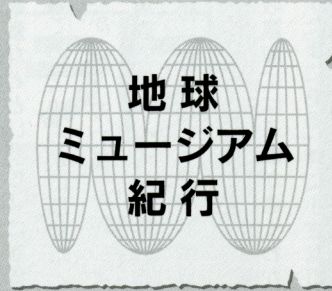


ハノイで人気の博物館

樫永 真佐夫 (かしなが まさお)

本館民族社会研究部



ベトナム民族学博物館/
ベトナム

グハウスで寝泊まりするのだという。展示家屋に人を生
活させるという荒技は、ベトナムにかかわり続けてきた
わたしにとって、なんだか微笑ましかった。
この博物館は、諸外国の博物館や研究者との交流を通
じて次々に新しいアイデアを取り入れ、特別展開催、
地域住民や駐在外国人家族向けのワークショップ、地方
の博物館職員向けの博物館学研修など、さまざまな新し
い試みを実施している。まもなく一〇周年。民博より規
模はずっと小さいながらも、年間一五万人を集客するハ
ノイで人気の博物館である。

一九九七年八月のある雨上がりの朝、わたしはハノイの郊外で泥濘にタイヤを取られたバイクをついに放り出して、膝まで泥をはね上げながら道を急いだ。草ぼうぼうの休耕地のあいだに屑置き場などが並ぶ、くすんだ景観とは不釣り合いに真新しい白亜の建物が、すぐそこに見えている。
門が開いていないので塀を越えて入り、ガードマンに「フイ館長と約束があるのだが」と告げると、「いくらなんでも、今日は休みだろうよ」と、覚悟していたとおりの答えが返ってきた。仕方なくお茶だけごちそうになって帰った。
それから二カ月以上経ち、ハノイから四〇〇キロメートルも離れた村でわたしが調査をしているあいだに、その建物はベトナム民族学博物館として盛大にオープンしていた。五四民族を擁する民族的、地域的多様性を国内外の人びとに紹介し、文化関連の問題解決に向けた提言もする研究博物館である。

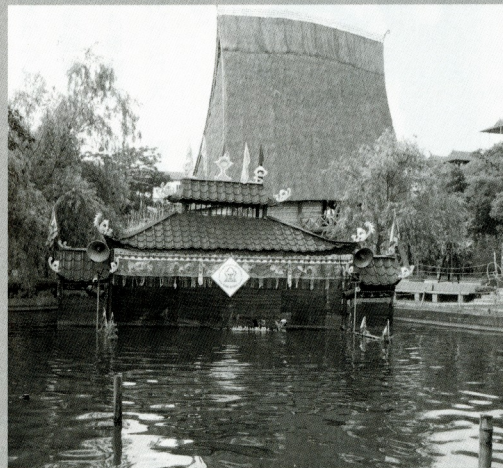
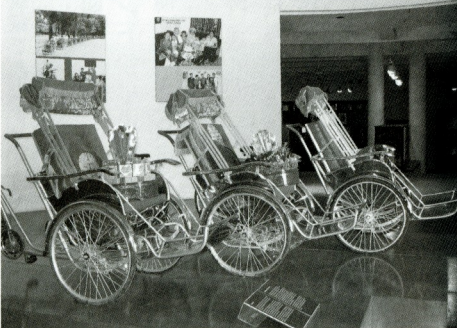


ベトナム民族学博物館本館展示場正面

チャム族家屋内に展示された伝統織機。
来館者も手を触れることができる



定期的に特別展示も開催される。
写真は2006年上半期の結婚式に関する展示



池に水上人形劇の舞台を設置。
村落から継承者をよんで定期的上演もされる。
舞台の背後にはバナ族の家屋がそびえている

翌春にハノイに戻り、調査報告のために訪ねて驚いた。まず、わたしのバイクを苦しめた名もない道が、片側三車線もある堂々たる大通りになっていた。しかも通りの名は、初代館長の父で、有名な民族学者グエン・ヴァン・フエン。さらに、開館数カ月前に蜘蛛の巣とホコリにまみれていた建物内部は、控えめな光に展示品が奥ゆかしく照らし出されていて、垢抜けてさえ見えた。
当時、本館の裏手はほとんどサラ地であった。それが今では、諸地域の民族の伝統建築物がいくつも移築され、野外展示場の名に恥じない。これからも家屋はもっと移築されるのだという。
一昨年前、野外にあるエテ族のロングハウスに入ると、内部の各房に個人の着替えや荷物が並び、囲炉裏も使用されている気配であった。そこを見慣れない白装束の男性たちが、出たり入ったりしている。ことばもベトナム語ではない。尋ねてみると、皆チャム族であった。チャム家屋の修繕のために来ていて、終わるまでエテ族のロン